

2002年度 人文学研究所活動報告

共同研究グループ

ポストコロニアル・スタディーズの冒険

本研究グループは、2000-2001年度神奈川大学共同研究奨励金「ポスト植民地主義思潮の研究」の成果として、神奈川大学評論叢書第10巻『ポストコロニアルと非西欧世界』御茶の水書房（2002年9月）を公刊した。今後の研究活動の展開については、現在模索中である。

（永野善子）

現代精神史におけるスペイン内戦の意義

グループ：「スペイン内戦の精神的意義」

活動内容：2002年度は、構成員で座談会を一回持ち、今後の展望について協議した。構成員数が少数であり、さらに重要メンバーが定年退職されることを踏まえ、当共同研究の意義は確認されつつも、2003年度以降の活動・展望については、さらに協議を重ねる予定。

（大林文彦）

物語研究

本グループは発足して7年になる。本年度の活動は、構成員各自の研究には進展があったものの、グループとしての活動は、残念ながら低調だった。

本グループの研究は、神話、伝承、前近代の物語、近代小説まで、口承書承を問わず、物語性をもつ言語表現の形態全般を対象として、ストーリーやプロットなどの（構造的）論理を考究すると共に、時間的・偶然的な要因である歴史性についても幅広い視点から考察を深めることを目的としている。

ただ、グループの発足以来の悩みは、構成メンバー6名（常勤教員5名、非常勤教員1名）と少ないうえ役職者も多く、研究活動の日程調整がきわめて難しいことであった。今年度は、殊に大学の諸制度の見直しと改革が強力に推進される過程に当たっていて、一層困難が大きかった。その結果、冒頭に記したような状況に追い込まれたのだが、大学改革が今後も半ば恒常的に進められなければならない以上、グループ活動のあり方を抜本的に見直す必要に迫られている。この事実を率直に認めなければならない。

幸い、平成15年度には、本研究グループの発起人であり、実質的な責任者でもある日高が学部長職を離れ、再度イニシアチヴをとれる環境が整う。それを前提として、平成16年度に研究成果の刊行を期して活動を再活性化したい。

なお、上記の困難な研究条件の中で活動を継続する方策として、構成員各自がある程度纏まった文章を他の全メンバーに随時送付して相互批判を乞うという融通性のあるシステムを採用し、これを「物語研究会通信」と名付けてきた。他のメンバーが来信に自由に応答しながら、次の発信を用意するのである。本年度も、一例を挙げれば本学の公開講座とタイアップして鈴木（陽）が編書『中国の英雄豪傑を読む―「三国志演義」から武俠小説まで』（大修書店）を出版するなど、この面ではそれなりの成果があった。

（小馬 徹）